

# 日本語教育における「日本語交流会」の試論的研究 ——「オンライン日本語交流会」実施の有用性について——

河崎 絵美

## 1. はじめに

多言語多文化共生社会を目指す現代において「外国人」は身近な存在となり、誰もが外国人と交流する機会に恵まれた社会となった。しかし、積極的に「外国人」に関わろうとする学生は一部に留まってしまっている。この背景には「英語ができない」や「カタコトな日本語を話す」といった、ステレオタイプの「外国人」や「学習者」に対するイメージが影響すると思われる（高橋（2019））。これまでのステレオタイプの「外国人」や「学習者」のイメージを払拭するためには、日本人の母語である「日本語」で交流することが効果的であると考ええる。

本交流では、日本語母語話者である大学生と日本語学習者との交流の場を設け、その交流が学生へ与える効果を検証することを目的としている。学生たちの交流中の反応および授業後の感想をもとに、教師の所見からその有用性と課題について論じる。

## 2. 研究目的

日本語教育にとって、学習者との関わりは重要な経験となる。将来、様々な国の学習者と良好な関係を築くためには相手を知り、理解し、受け入れるための能力育成が必要となる（岐部・櫻井（2019））。その育成のためには異文化接触の機会を提供し、異文化に対する適切な認識を促す指導が重要となる。

本稿では、日本語母語話者と日本語学習者との「交流の場」を設定（以下、「日本語交流会」と呼ぶ。）し、「日本語」を用いることを条件として提示する。ここでは、これまでのステレオタイプのイメージを払拭するため「日本語交流会」を一つの手段として位置づけ、国内、ベトナム、インドネシアを対象に実施を試みる。

交流時の学生たちの反応および授業後の感想から、この様な交流が学生たち

のステレオタイプなイメージにどのような変化与えるかを明らかにすることを目的としている。

仮説1：「日本語交流会」のような場を設定することで、異文化への探求心が期待できる。

仮説2：「日本語」で交流をすることで、ステレオタイプなイメージが払拭でき新たな交流に対する動機付けが期待できる。

### 3. 調査概要

#### 3-1. 調査対象（日本語母語話者）

文系大学3年生 日本人大学生6人（男性5人、女性1人）を調査対象とした。

#### 3-2. 調査協力者（日本語学習者）

第1回交流会（日本国内）：

K日本語学校在学および卒業生6人（男性4人、女性2人）

第2回交流会（インドネシア）：

P日本語学校在学9人（男性6人、女性3人）

第3回交流会（ベトナム）：

T日本語学校在学3人（男性1人、女性2人）、

※日本語教師10人（男性5人（ネイティブ2人）、女性5人（ネイティブ2人））

#### 3-3. 調査日時

第1回目交流会：2020年6月12日 午後13：00－14：00（日本時間）

第2回目交流会：2020年6月19日 午後13：00－14：00（日本時間）

第3回目交流会：2020年6月26日 午後13：00－14：00（日本時間）

#### 3-4. 調査方法（手続き）

日本の大学に在籍する日本人大学生（日本語母語話者）6人に対し、各自所持するパソコンや携帯電話を利用し、交流会に出席することを義務付けた。交流には本学が推奨する「Zoom」と「Google meet」を採用するが、交流先の状況を踏まえて、どちらを使用するかは交流会当日までに知らせるようにした。交流後は自由に感想をまとめ、提出することを授業内課題として提示した。この

学生が提出した感想文と授業中の様子を観察し、記録したものを教師の所見から分析する。

#### 4. 「オンライン日本語交流会」の観察と記録

##### 4-1. 第1回目交流会：日本語中上級話者との交流

日にち	2020年6月12日（金）
時間	13：00－14：00
参加者	日本人大学生6人、学習者6人
使用	Google meet
参加条件	日本語のみで会話をすること

2020年6月12日（金）、午後1：00－2：00で交流を行った。まず、全員のカメラとマイクを「ON」にし、出席状況の確認を行った。次に調査対象者の簡単な自己紹介をうながし、次に学習者の簡単な自己紹介をお願いした。両者には緊張からか表情が硬い印象であった。ここまでは教師が主にコントロールを行い、授業を進めていった。

自己紹介の後、調査対象者側が予め教師に決められた相手へ Google meet の招待メールを送り、招待メールに承諾してマンツーマンの会話を開始する形を午後1：30－2：00の間行った。会話の内容は自由としていたが、初対面であることから、予め調査対象者には①日本語学習動機／期間／方法について② covid19 の対策／現状について③将来の夢などを話してみてもどうかと提案しておいた。午後2：00からはフィードバックを行うため、調査対象者のみ授業 URL へ再入室をさせた。その際、一人ずつ本日の感想を簡単に述べてもらった。感想を述べる際は、緊張から解放された様子が全員から見受けられた。

## 4-2. 第2回目交流会：日本語初級話者との交流

日 ち	2020年6月19日（金）
時 間	13：00-14：00
参 加 者	日本人大学生6人、学習者 人
使 用	Zoom
参加条件	教材「まるごと」から既習文型表現を利用すること

2020年6月19日（金）、午後1：00-2：00で交流を行った。まず、全員のカメラとマイクを「ON」にし、出席状況の確認を行った。次にインドネシア側の日本語教員から簡単な挨拶、その後日本側が簡単な挨拶を行い、Zoom機能を利用してランダムにグループを作成し、各自で会話を進めるよう促した。できるだけ全員と会話ができるように10分強でメンバーの入れ替えを教師側で行った。

予め教材と、使用する課の文型表現を指定していたため、会話の出だしは問題なかった。しかし、少しでも基本文型から外れた表現や語彙、あるいは方言を用いると、学習者の理解が得られずに沈黙する場面が見受けられた。沈黙が長く続く場合のみ、教師がマイクをONにし、状況把握後に改めて話題の提示を行う等のコントロールを行った。

授業後、Google classroomに授業の感想を簡単にまとめることを課題として提示した。この課題には①交流して自分の意識がどう変化したか（交流前と後の自身の心境について）②ZOOMを利用した交流について思うこと・感じたこと／教員に対してリクエスト（改善）すること等を書くよう指示した。

## 4-3. 第3回交流会：日本語初級話者と、日本語教師との交流

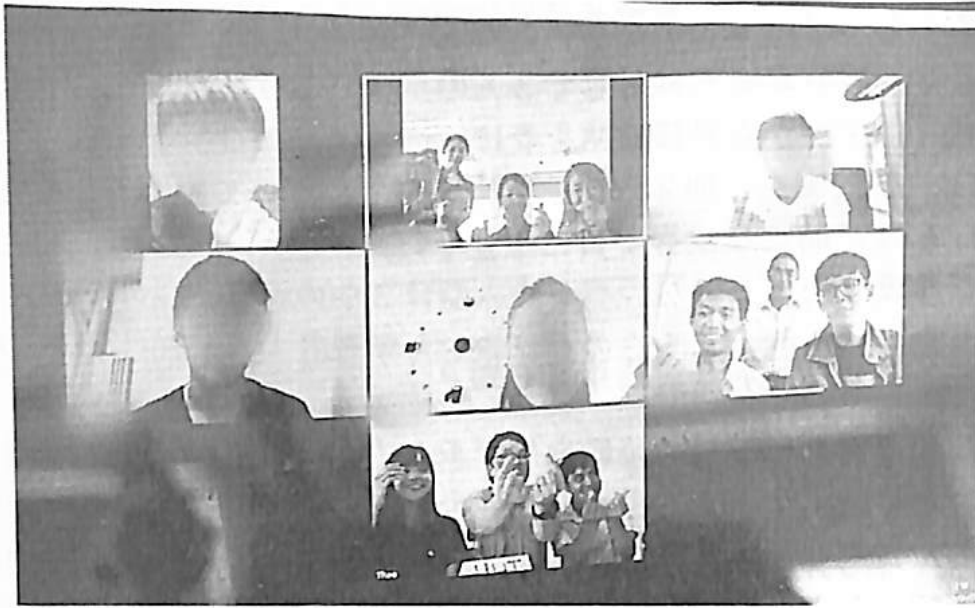
日 ち	2020年6月26日
時 間	13：00-14：00
参 加 者	日本人大学生3人、学習者3人、日本語教師10人
使 用	Zoom
参加条件	日本語のみで交流すること 日本語教師へ質問をすること

2020年6月26日（金）、午後1：00-2：00で交流を行った。まず、全員のカ

メラとマイクを「ON」にし、出席状況の確認を行った。この日の調査対象者の出席率が悪く、履修者8人に対して3人の出席であった。なお、欠席の理由に対しては事前に学生から直接連絡を受け状況の把握はできていた。次に、ベトナム側の日本語教師から簡単な自己紹介と学校について説明をしてもらった。その後、日本側が簡単な挨拶と自己紹介を行い、Zoom機能を利用して3つのグループを作成した。この日、ベトナム側は3つの教室、3台のパソコンを使用した。つまり、1教室に1台のパソコンと学習者1人と教員2～3人程度という状況であった。

交流会開始後30分は学校の施設をリアルタイムで見学し、その後は10人の日本語教師の教師歴、ベトナム滞在歴を含めた自己紹介を聞いた。その後、調査対象者による質問を受け付けていただいた。質問は「日本語で日本文化をどうやって教えているか」「日本語学習者の就職活動について」「ベトナムで生活して困ったことはないか」という日本語教育に直接関するものから日本語学習者の現状や日本語教師のライフスタイルにまで及ぶ内容が挙がった。これに対し、日本語だけで文化や日本事情を教えることの限界についてご教授いただき、ベトナム人日本語教師からはベトナムの一般的な就職活動についてご教授いただいた。またベトナムで生活をすることの苦勞については「苦勞より毎日が新鮮で楽しい」「困ったことや愚痴を現地の人にぶつけることでベトナム人はどう思い、感じるかということ意識して生活している」という先生方のご意見に、全員が驚きの表情を浮かべていた。

一方、学習者との交流では日本語で簡単な自己紹介を行った後、その自己紹介をベトナム語に翻訳するとどうなるのかを教わった。口頭のみでの交流であったため、調査対象者は何度も聞き返す様子が見受けられた。この調査対象者の聞き返し時に用いた表現が学習者には理解できない様子が何度も確認できた。また、調査対象者も他の表現に言い換えることができず、困惑している様子が頻繁に見受けられた。交流時の教室環境は、学習者の横に日本語教師がサポートで2人付いていたこともあり、調査対象者が言い換えできずにいた表現を日本語教師が見事に言い換え、理解を促す様子をリアルタイムで体験することができた。日本語教師のサポートにより、調査対象者はベトナム語で自己紹介ができるようになっていた。調査対象者がベトナム語で自己紹介をする様子を学習者はとても嬉しそうな表情で見ている。学習者だけではなく、日本語教師も嬉しそうな表情であることを確認した調査対象者は、さらに嬉しそうな表情で、達成感に満ち溢れた様子であった。最後は、皆で記念写真を撮影して交流会は終了した。(資料)



資料：記念撮影の様子

授業後、Google classroom に本日の授業の感想を①日本語教師へ質問をして、どのように日本語教師の仕事を捉えるようになったか②ベトナム語を教えてもらおうという活動をして、外国語学習について、どのような考えを持つようになったか。③対面ではなく、オンラインでこのような交流をすることに対してどのように思うかという点を含めてまとめるよう指示をした。

## 5. 考察

### 5-1. 第1回目交流会：日本語中上級話者との交流

マンツーマン交流会の効果は高く、調査対象者が指定時間に再入室した際の表情は明るく、皆笑顔であった。教師が感想を求めるより先に、どのような話題で話をしたか、学習者がどのような人であったか、あるいはネットワーク環境に問題がなかった等を話し始め、お互いに交流の様子を報告しあう姿が見受けられた。

具体的には、調査対象者の交流開始前と交流開始後で最も顕著に変化が見られたのは表情であった。皆、表情は明るく笑顔であった。また、声の調子も異なっていた。交流後の声の調子の変化としては、声のトーンが高くなり、話す速度もはやくなっていた。また、使用する表現もくだけた表現を用いるなどしていた。そこから「楽しかった」であろうことが推測できた。実際にマンツーマンで話をしてみてどうだったか尋ねると、全員が「楽しかった」と即答をし

た。その様子から、興奮冷めやらぬ勢いを感じずにはいられなかった。ただ、調査対象者から二つの問題点が報告された。

問題点の報告として一番多かったのが「不安定なネットワークで時折、音声や画像が乱れた」というものであった。これに関しては、調査対象者自身も仕方がないという認識であるものの、せっかく交流するのであれば何も問題ない状態で行いたいという心理からの発言であろうと推測される。次に「イスラム教の金曜礼拝が始まるということで、時間いっぱい話すことができなかった」という報告があった。調査対象者のうち2人は金曜礼拝のため、途中で交流会を中断していた。これに関しては、事前の情報入手が不十分であったことが原因で生じた問題である。今後は、交流時間内の参加状況について事前に終了時間まで在籍することができるかどうかの確認をする事で問題の解決とする。

本活動中は、一切教員の目が届かない状況下のマンツーマンでの会話を強いられたため、調査対象者は他の誰かに頼ることなく、自らの力で交流会を終えたと言える。この絶対的な状況は、積極的な発言や活発な交流を生み出す有用性が高い結果となった。だが、教員の目が届かない範囲で行ったため途中で交流会が中断された事実気づくことが遅れた。今後、自由な発想や自由な交流を目的とした交流会を設ける場合は、常に教員の待機する部屋へ入退室ができるよう設定をするか、チャット機能を利用するなどして連絡がとれる状況を設ける必要があることが明らかとなった。

## 5-2. 第2回交流会：日本語初級話者との交流

前回の反省を生かすべく、予め金曜礼拝のため途中退室をする参加者について調査対象者に知らせておいた。だが、実際は交流会終了時まで一人も途中退室をしなかったのである。交流中、途中退室を予定している学習者に対して校長先生から「礼拝へ参加する人は退出してください」という言葉がかけられたが退室する者はいなかった。なぜそのような判断を下したのかを直接問うことはできなかったが、学習者が交流に対して「もっと話したい」「もっと交流して欲しい」という学習の継続を希望する気持ちが強く働いた結果であると信じている。また、調査対象者からも最後まで全員で交流できたことは非常によかったというコメントであった。

今回の交流では、いくつかのグループに分類して交流を行った。全ての参加者が平等に交流できるよう10分強でグループの入れ替えを行った。グループの入れ替えは全て教員側で操作をし、教員は自由にグループ内に入りしなご様子を観察し、必要であれば話し方についてのアドバイスや、沈黙に対する対

処等のコントロールを行った。調査対象者からは、グループの入れ替えがあることで全員と話すことができたことと教員側のコントロールによってグループの入れ替えがスムーズに行われたことに対する評価が高かった。調査対象者はこの活動を通して、初めてオンライン交流の「便利さ」を実感していた。同様に、教員側もグループ内を網羅的に閲覧できる機能に可能性を感じることができた。この機能は、教室コントロールおよび授業者としては非常に有用性を感じた。とはいえ、全てのグループを網羅的に確認することしかできないため、全体像を含めて評価をするという点では課題が残る。

初級日本語学習者をイメージして行われた今回の交流では、調査対象者にとって「異文化」を体感する初めての機会となったことは言うまでもない。事前に使用可能な文型表現や語彙を提示し、交流内容もある程度決められた範囲内で行うことを指示したものの、日本語学習者に対して日本語で話すということは想像の範囲を遥かに超えたものであったようである。調査対象者全員から「日本語でどうやって伝えたら伝わるかがわからない」「日本語を伝えるのは難しかった」「日本語は難しい」という感想が提出された。同時に「日本語教師はどうやって日本語を教えているのか知りたい」といった日本語教育に興味を抱いたことが確認できる感想も提出されていた。このことから、初級日本語学習者と交流をするという活動を通して、日本語教師という職業についても興味や関心を抱かせることができたと言える。

### 5-3. 第3回交流会：日本語初級話者と、日本語教師との交流

これまでは日本語学習者との交流会であったが、今回は初の試みとして日本語教師との交流を実施した。日本語教師と交流することで、日本語教育の現場を具体的にイメージすることができ、興味や関心を強める狙いである。実際、ネイティブとノンネイティブの日本語教師と話すことができ、両方の立場から日本語教育について情報を得ることができた。具体的には、授業内容や日本語の教え方、仕事内容や海外で生活をする上での苦労や日常についてといった多岐に渡る質問であった。質問時、調査対象者は普段通りの話し方で、方言や敬語表現を用いてやりとりを行っていた。

授業後の感想には「日本語教育は言葉を教えるだけに限らないことを知った」「日本語教師はイラストや写真の他に再現するという方法で学習者に理解をさせるという方法をとっていることを知った」「ベトナム人日本語学習者がどのようにして就職活動をしているのかを知った」「現地での生活で不満も満足も相手に伝えることができずにモヤモヤする経験があることを知った」「海外で



の生活に不便さを感じるより先に好奇心が勝つという話に、自分もそんな風を感じられるほど海外のことを知りたくなったし、学習者にも同じように好奇心を持ってほしいという気持ちが芽生えた」等の意見が述べられた。これらは、今回の日本語教師との交流の目的を達成できたことを表している。

日本語教師との交流後は初級日本語学習者にベトナム語を日本語で教えてもらうという活動を行った。この活動の背景には、ベトナム人学習者から日本語だけで日本人と話しをするのは恥ずかしいという意見が出たためである。日本人大学生と交流するというのにやや消極的な学習者にとって、実際マンツーマンで交流させることは学習効果が得られないと判断した。そのため、ベトナム語を日本語で教えるという課題を提示し、その際に日本語教師がサポートにつくことで交流を前向きに捉えさせる工夫を行った。調査対象者はベトナム語学習の経験がないことから、簡単な自己紹介を教授するというテーマで交流を開始した。

ベトナム語学習を終えた調査対象者からは「自然に使う表現から教えてもらうことで、外国語に対するできないという先入観を持たずにできた」「日本語でベトナム語を教えてもらうことで、聞きなじみのない音もすぐに聞き直すことができた」「初めてベトナム語を聞いたが隣接する中国語に近い音が発見でき、地理的なことをイメージすると外国語学習がより楽しいと思えるようになった」という感想であった。この交流では調査対象者は受身であることが多かったが、「え？なんて？」「もっかい言って」など自然な口語表現を用いてベトナム語学習に集中していた。これは、学習者にとっては自然な表現を学ぶ機会の提供となったに違いない。また、ベトナム語学習に集中している調査対象者の姿に、緊張からサポート教員に頼りきっていた学習者も徐々に笑顔と笑い声を交えながら交流をする様子が観察できた。学習者の隣に日本語教師がサポートとして付いていることは、調査対象者にとっても学習者にとっても不安を軽減する存在として役立っていた。

## 6. 今後の課題

本調査内において調査対象者は国内、ベトナム、インドネシアと3回の交流を経験した。2か国以上の学習者と3回の交流の場を共有できたことで、異文化に対する探求心を確認することができた。交流時においては、調査対象者にとって母語である日本語を用いたこと、学習者の日本語に触れたことで「外国語としての日本語」を認識させることができた。そして、この気づきがこれま

でのステレオタイプ的なイメージを払拭するための一助となったことは非常に興味深いものである。よって、仮説1および仮説2は証明された。

以上のことから、日本語教育において学習者との関わりを密にする手段に「オンライン」の活用が有用性高いものであることも明らかとなった。今後は日本語教員養成課程において学習者と共に「日本語」で学ぶことの意義を具体的に示すことが課題である。

#### 参考文献

阿曾村陽子 (2019) 「日本語学校における研修の在り方の一考察：現場の声を元に」 二松学舎大学論集62号 P.23-P.46

岐部慶子、櫻井千佳子 (2019) 「教員養成課程の大学生が持つイギリスに対するイメージの変容：体験学習が異文化適応能力の深化に与えた効果」 武蔵野教育學論集7. PP. 31-46

高橋朋子 (2019) 「<各種報告>夜間中学外国人生徒との交流による近畿大学生の学び」 近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編10(2), 165-176. 近畿大学全学共通教育機構教養・外国語教育センター

藤平愛実・鈴木基伸、西尾信大、今西利之、渡辺史央、小森万里、加藤均 (2019) 「日本語教育における遠隔授業見学の有用性と課題」 大阪大学日本語文化教育センター授業研究. 17P.29 P.47

岡本拓、杉島夏子 (2020) 「社会的コミュニケーションの場づくりを目指したオンライン会話会 ―インドネシアの高等学校における非母語話者日本語教師を対象として―」 国際交流基金日本語教育紀要16号 P.41-50

文化

#### 参考資料

文化審議会国語文科会 (2018) 「日本語教育人材の養成・研修の在り方（報告）について」

文化審議会国語文科会 (2020) 「日本語教師の資格の在り方（報告）について」